

「オーロラ撮影(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

氷点下 30℃以下にもなる冬の北極圏。こんな過酷な環境を旅行する目的は、もちろんオーロラの観望である。冬の北極圏といっても、場所によって気温は大きくちがう。森の中は暖かい。氷点下 15℃もあり、まるで夏のような。しかし、何も遮るものがない氷原は寒い。時に氷点下 40℃にもなる。長時間外にいるのは危険な気温である。金属に素手で触れるのも、深呼吸も厳禁。「寒い」というのは、ああいう状況を言う。



「レンタカーの外気温表示」 ビビること大あり。

しかし、オーロラの撮影には、雪原ほど適した場所はない。スウェーデン北部では、オーロラは通常、北側に出現する。Northern Light の名の通りだ。これは、オーロラ帯の中心が北緯 70~72° 付近にあり、観測地はそれよりもわずかに南に位置するからだ。



「北の空に現れたオーロラ」 オーロラの出始めは、このように虹のようなアーチがかかる。「オーロラアーチ」という。輝星はこと座のベガ。北極圏では、こと座は周極性となり、24 時間沈まない。

しかし、ブレイクアップ(オーロラ爆発)と呼ばれる現象が起きると、全天を緑のカーテンが覆う。それを思うままに撮影するには、周囲に何も無い雪原が最適なのだ。そういう場所は、夏の間、湖か湿原になっている場所である。夏は蚊が多く、冬はとにかく寒い。つまり、人間が住むには適していない。



「雪原のオーロラ」 オーロラの撮影にはこういう場所が一番いい。しかし非常に寒い。

ここまで寒くなると、使い捨てのカイロはあまり役に立たず、昔ながらの「桐灰カイロ」が役立つ。それでも人間は、エスキモー並みに防寒具を着込めば、自分の体温で何とか寒さを避けられる。しかし、カメラはそうはいかない。一眼レフカメラの場合、最悪シャッターが下りなくなってしまう。この地でオーロラを撮るには、カメラの防寒対策も重要なのだ。



「完全防備のカメラ」 通称「エレファントマン」。タオルの中を「桐灰カイロ」で暖めている。